

徳のある人間に成れ

先月の7日、先代の住職（祖父）

と、祖母の吉周忌・参回忌の法要を厳修した。法要後、住職のお話を聴聞して、先代の住職がよく口にしていた言葉を思い出した。それは「偉いお坊さんにならなくてもよい、それよりも立派なお坊さんになりなさいよ」ということである。「偉いではなく立派」です。言うなれば、地位や名譽といった肩書きなんてものは必要ない。それよりも人から、「有り難いお坊さん」と言われるような、そんな「徳のあるお坊さん」になりなさい、という意味である。

何かを成し遂げた人で、よく人に説教をしたがる人っているでしょう。私の生き方はこうだ、ああだと。そういうのは結局、相手の為に言っているわけではない。自分のことを自慢したいだけで、主語は自分にある。これは非常に残念なことである。逆に「真心」で人と直に向き合うことによつて、より多くの気付きを得られる事も知らずに。

いま学校をはじめ、社会で子供達に、いや子供だけではない。むしろ、その子供を教育する立場にある大人の方が必死に学ばなければならぬのかもしれない。本当に教えなきゃいけない事は「心」というものであ

る。そして、それは則ち「徳を養う」ことである。簡単に言えば、人を喜ばすという想いが根底になれば、人間の根は育たないのではないか。では根とは何か？

植物がイキキと生育していくのに欠かせないのは根である。土中の目に見えない働きがあつて花は咲き、葉は生い茂る。人間も然りである。人が人生という時間軸の中で自らの花を咲かせていくには、根が無ければならない。根を養っていない人はいささかの風にも傾き倒れる。植物も人間も自然の摂理の前には等しく、平等である。

その根を養うために、かつての日本は古典を大事にした。これが百八十度逆転したのはアメリカ式教育が導入されてからだ。戦後のアメリカ式の「何かに直ぐに役に立つ」事だけに焦点を当てた合理的な考え方は根本的に間違っている。

『仏教』をはじめ、『論語』にしるきリスト教の『聖書』にしる、古典は何千何百年という間、何億人という人の眼に触れながら、厳しい選択の中で今日まで残ってきたことを考えると、それがいかに大切な人類の叡智であるかを改めて思い知らされる。学校教育において古典の時間は大きく削られ、最も重要な修身教育は廃止された。その修身教育とは、他人と共存共栄し、感謝しながら生きることを説いている。

いまの学校教育には、人間の根を養い、いかに生くべきかという根本的な問いに答えられるだけの教科がない。

言つてもなく、教育とは分からない事を分かつて、出来なかつたことを出来るようにすることである。そこには発見があり、感激がある。また感激は、人間の根を養うのである。

「食つて寝て起きて糞たれて、人生を無自覚なまま漠然と生きるな」、こういう言葉があるが、1度きりの人生を精一杯生きたい。そして万人は誰しも人生を幸せに過ごしたいと願っている。この願いを叶え、根を養う方法がある。次の通りである。

「人間は人の役に立つて生きるべきである。そして自然の摂理に従い、自然の摂理に逆らわない事である」。これを実践することで根は養われるのである。一見簡単そうだが、実は難しい事である。この根本精神を確立した上で時流を読み、その流れに自分の役割（仕事）を当てはめる。まずは自分から率先して人の役に立つ。それが全ての始まりだ。この根がシッカリしていれば道は開ける。考え方が人間の生き方を決め、その生き方が足元を照らし、道を切り開いてくれる。人のお役に立ちたいという考え方が、徳を生み育てるのである。また、感謝しないと人間の根っこは腐る。優秀すぎる人は感謝を忘れて、自分がやったと思うところから失敗が始まるのではないか？ 人に対する感謝が大事なのである。

仏教では人間の根を養う方法として六波羅蜜（六度）が説かれる。布施（与える）・持戒（自ら戒めるものを持つ）。

忍ぶ。精進（仕事に一生懸命打ち込む）。禪定（心を落ち着かせる）。智慧（以上の五つの修養に努めていると生まれる）。以上はそのまま心の根を養う実践徳目である。中でも特に根を養うのに大事なものは「忍辱」ではなからうか。人生の艱難辛苦に耐え忍ぶ。植物が厳しい風雪や干天にさらされるほど強く根を張るように、人間の根もそこに養われるのである。

書の世界に独自の境地を開いた相田みつを氏に『いのちの根』と題する詩がある。

「なみだをこらえて かなしみにたえるとき 愚痴をいわずに くるしみにたえるとき いいわけをしないで だまつて批判にたえるとき いかりをおさえて じつと屈辱にたるとき あなたの眼のいろが ぶかくなり いのちの根がぶかくなる」。

いま私は祖父のおっしゃった「徳のあるお坊さん」に近づいているのだろうか？ 少しでも「ありがたい」と想われる様な、「徳のあるお坊さん」を目指し、地道に真心を込めて努力精進をしていきたいと思ひます。

合掌 副住職 谷川 寛敬

